

## 【講演 1】

### 移行期医療とは？

#### ～長野県移行期医療支援センターの現状と課題

福山哲広

信州大学医学部小児医学教室

小児期発症慢性疾患患者の移行期支援は、「小児医療から成人医療システムへの移行」と「患者の自律支援」、という二つの柱からなる。移行期支援が重要になってきた背景には小児医療の専門分化・集約化・高度化が影響している。長野県では多くの小児期発症慢性疾患患者が長野県立こども病院に集約化されており、結果として成人になってもこども病院に通院し、居住地に頼れる医療機関がない状態が発生している。

令和 2 年 10 月、全国で 7 番目の移行期医療支援センターが信州大学医学部附属病院に設置された。敢えて長野県立こども病院ではなく大学病院に設置したのは、成人診療科との円滑な連携が目的にあるからである。移行期支援センターにはコーディネーターが配属され、診療連携や就労支援業務を行っている。信州大学医学部附属病院と長野県立こども病院が中核となり、患者中心のシームレスな医療の提供ができる連携と、就労を含めた自律支援の体制整備を構築していきたい。

## 【講演 2】

### 成人移行期支援を経験して感じたこと

#### ～看護の立場から～

倉科美穂子

長野県立こども病院

今回、移行医療支援コーディネーターとして、気管内吸引・酸素吸入等の医療的ケアが必要で軽度知的障害のある A 君の支援に携わった。主治医が A 君の身体面、精神面、社会面を考慮し、高校卒業を目途に地元の成人科への移行を保護者に提案し同意を得た。移行医療支援の介入をしている中で、A 君が自分の病気とケアについて周囲の人に説明できないことがわかり、吸引や酸素吸入の必要性の説明、緊急時の対応等ができるようにプランを立て半年ほどかけて指導を行った。成人科への移行先は地元の総合病院、クリニックをあたったが決まらず、最終的にはつながりのあった地元の小児科が見つめてくれた。受け入れ先となる成人科を見つけることの難しさを保護者と共に実感した。

今回のケースを通じ、移行医療支援は早期から本人と保護者、医療者が共通認識を持って準備することが重要であり、移行先を決めるためには地元の医師や地域連携室との連携が不可欠であると痛感した。

### 【講演 3】

#### 大学病院とこども病院の診療連携による成人先天性心疾患診療体制の構築 ：長野モデルの現状と今後の展望

元木博彦

信州大学医学部 循環器内科学教室

信州大学医学部附属病院 成人先天性心疾患センター

本邦における成人先天性心疾患診療体制の構築は喫緊の課題であるが、ゴールとしての診療体制のビジョンや、体制構築の過程で生じる課題など不明な点が多い。2013年6月に信州大学に成人先天性心疾患センターが開設され、今後の診療連携の基盤づくりが始まった。信州大学循環器内科と長野県立こども病院循環器小児科が連携し共同外来を行い、双方向性の診療体制を構築することを目標としている。具体的には両施設での移行外来を実施し、治療については、先天性心疾患への外科手術やカテーテル治療をこども病院が担当し、成人病や心不全管理、冠動脈バイパス術、カテーテルアブレーション治療を信州大学が担うこととした。連携体制はハード面での統合ではなく、既存の設備や専門性を生かしつつソフト面での連携を行うことでの協力体制をめざしている。さらに、県内では地域医療機関との連携体制を整え、大学病院内では周産期管理や精神科的管理が行える体制づくりを進めている。

長野県における地方大学とこども病院での新しい診療体制構築の試みを「長野モデル」として紹介し、主に患者を受け入れる側としての大学病院の取り組みについて報告する。

### 【講演 4】

#### 教育における移行期の課題

##### ～特別支援学校教育相談の立場から～

宮内 かつら

長野県松本養護学校・教育相談

現在の特別支援教育は平成19年度(2007年度)にスタートし、特別支援学校には、「教育相談専任」が配置された。それから14年。幼稚園保育園・小学校・中学校・高等学校の教育相談の現場における、特別な支援を必要とする児童生徒及び保護者、学校職員からの相談の現状と相談内容から、「移行期」における支援体制の変化や課題について改めて考えてみる。

また、教育現場で相談ニーズが増え続けている「発達障がい」のある児童生徒や、「発達障がい」と「他の疾患等」を併せ持つ児童生徒の支援と、各ライフステージによる支援の課題について、具体的な事例にも触れながら考えてみる。